

「出題の意図」

選抜区分	2024年度（選抜区分：学校推薦型選抜） 法学部 法律学科及び政策科学科（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	<p>1 課題文選択の背景</p> <p>出典は、アダム・プシェヴォスキ著（粕谷祐子・山田安珠訳）『それでも選挙に行く理由』（白水社、2021年9月）である。本書は、政治体制論を専門とする筆者が、選挙という民主主義の中核的的制度が、さまざまな政治経済現象との間にどのような関係や効果を有しているか、自身の研究成果も踏まえて一般向けに平易に解説したものである。本問では、筆者が選挙の価値について正面から立論している序章と結論箇所から取り上げた。</p> <p>課題文で筆者は次のように主張する。世間一般で選挙の価値としばしば言われている側面（合理的な決定、アカウントビリティの担保、平等の実現……etc.）には、ほとんど実証的な根拠が存在しない（本書の各章ではそのことがデータを通じて示されている）。根拠や証拠のない価値を信じた有権者は、それが裏切られたと感じることによって、民主主義や選挙に対する失望を深めてしまっている。しかしそういった価値は、他の制度によっても実現不可能なのであって、選挙や民主主義を否定する理由にはならない。</p> <p>この際、筆者が着目するのは平和な権力交代の貴重さである。選挙という競合の仕組みがあるからこそ選挙結果には不確実性があり、今日の敗者（勝者）が明日の勝者（敗者）になる可能性があるからこそ、そして選挙結果から潜在的な対立の度合いを可視化するからこそ、両者ともに暴力を用いた抑圧や反乱といった手段に打って出ず、暴力と流血が回避される。この一点のみをもってしてもこれが重要な選挙と民主主義の価値であると論ずる。</p> <p>依然、世界の政治には暴力と流血があふれている。その回避と防止という観点から、選挙と民主主義を意義付ける筆者の主張を正確に読み取った上で、その限界と可能性について受験生自身でも考えてもらうことが、出題の狙いである。</p> <p>2 受験生に何を望むか</p> <p>まず、上述した筆者の主張を正確に理解し、適切にまとめる力が求められる（読解力）。次に、筆者の主張を踏まえたうえで、中学や高校で学んできた知識を総動員して、論理的・説得的に、選挙と民主主義というおなじみではあるが複合的なテーマについて考え、かつ自分の言葉で表現することが求められる（自説展開力）。</p>